

I14  
J3-7

# 世界動物文学全集

7

黒馬物語  
動物と  
私の友だち

尾

9033

I14  
J3-7

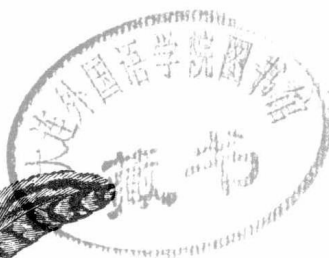
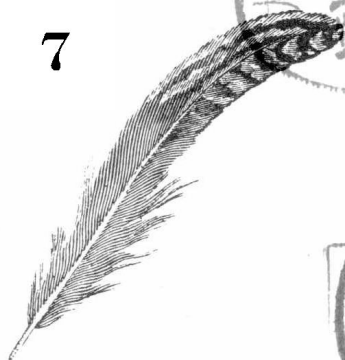


日文 701707693

110596

# 界動物文学全集

7



講談社

世界動物文学全集 7 黒馬物語  
動物と子供たちの詩  
私の友だちには尻尾がある

昭和 54 年 5 月 18 日 第 1 刷

著者 アンナ・シュウエル  
グレンドン・スワースアウト  
バージニア・マッケンナ

訳者 藤原英司  
安達昭雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112  
電話東京 (03) 945-1111 (大代表) 振替東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1500円



©藤原英司 安達昭雄 1979年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0397-405076-2253 (0) (文2)

## 目次

黒馬物語

5

動物と子供たちの詩

175

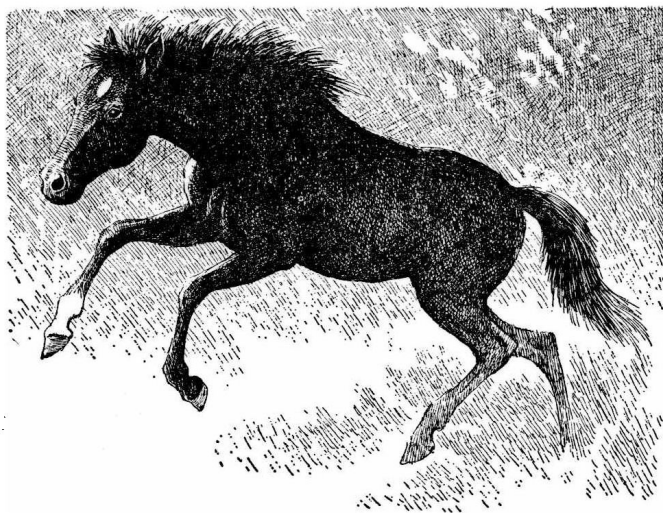
私の友だちには尻尾がある

287

解説・藤原英司

375

装幀 蟹江征治  
イラスト 田中豊美



黒  
馬  
物  
語

アンナ・シュウエル  
藤原英司訳

原題 BLACK BEAUTY

著者 ANNA SEWELL

# 第一部

## 1 幼いころのすまい

わたしが今でもはつきり思いだすことができる最初の場所、大きな美しい野原だ。そこには澄んだ水をたたえた池があった。何本かの茂った木がその上に枝をさしのべ、池の深いほうの端には、トウシンソウやスイレンが生えていた。生け垣の片側では、そのむこうに耕した畑地が見え、べつのがわには、道端に建っている主人の家の門が見えた。

野原のかみ手のはずれにモミの木が森があり、下のはずれには、切りたった岸があつて小川が流れていた。

小さかったころ、わたしは草をたべることができなかった。母親のミルクをのんで育った。昼間は母親のそばについて走り、夜には母親のそばに寄りそって横になった。

暑い時、わたしたちはいつも池のそばの木陰に立ち、寒

い時は森のそばの、いごちのいい暖かな風のあたらないところでした。

わたしが大きくなって草をたべられるようになると思う、母親は毎日、昼間は働きにでかけ、夕方帰ってくるようになった。

その野原には六頭の子ウマが、わたしといっしょにいた。その子ウマたちは、みんなわたしより年上だった。何頭かは、もういちにんまえのウマと同じぐらい大きかった。わたしはいつもかれらといっしょに走ったが、それはじつにおもしろかった。わたしたちは、いつもみんなといっしょに力いっぱい野原を走りまわった。そして、ときどき荒っぽい遊びをすることがあった。というのは、みんな、走るだけではなく、じつによく噛んだり蹴ったりしたからだ。

ある日、また子ウマたちがさかんに蹴りあっていると、わたしの母親がいなくて、わたしを呼んだ。わたしが母のそばへいくと、母はいった。

「わたしがこれから話すことを、よく聞くんだよ。ここにいるあの子ウマたちは、みんなとてもいい子ウマだよ。でもね、あの子ウマたちは荷馬車用のウマの子なの。そして、もちろんあの子たちは、まだお行儀も習っていないわ。でもね、あなたはいい血すじの、いい生まれの子ウマなのよ。あなたのお父さんはこのあたりでは、とても有名な。そしてあなたのおじいさんは、ニューマーケットの

レースで、二年つづけて優勝カップをとったのよ。また、あなたのおばあさんは、わたしは今までに知っているどんなウマよりも性質がやさしかったの。だから、あなたは、お母さんが蹴ったり噛んだりしたことは一度も見ることがないはずよ。お母さんは、あなたがやさしいウマに育って、けっして悪いことを覚えないうちにしておきたいの。じぶんの仕事をいっしょうけんめいやり、かける時は足をしっかりとあげて、たとえ遊ぶときでも、けっして噛んだり蹴ったりしないでほしいわ」

わたしは、母親がいったこの言葉を、けっして忘れなかった。わたしは母が経験をつんだ賢いウマだということを知っていた。またわたしの主人も、わたしの母親にとっても目をかけていた。母親の名はダッチェスといったが、主人はよく母親のことをペットと呼んだ。

わたしたちの主人は、気だてのいい、やさしい人だった。彼はわたしたちによい食物とよい小屋をくれて、親切なことをかけてくれた。彼は自分の子供に話すのと同じように、わたしたちにやさしく話してくれた。わたしたちはみんな主人のことが好きだった。そして、わたしの母も彼のことが大好きだった。母は、門のところに主人の姿が見えると、喜びのいななきをあげて、彼のそばへ小走りにかけていった。すると主人は母を軽くだいたりなりでたりして、こういう。

「やあ、すばらしいペット。おまえの小さいダーキーはど

うかね？」

わたしは、くすんだ黒い色をしていたので主人はわたしのことをダーキーと呼んだ。それから主人はわたしにパンをひときれくれたが、それはとてもおいしかった。また主人は時どき、わたしの母にニンジンをもってきた。ウマたちはみんな主人をしたっていたが、わたしは主人が、わたしたち親子をいちばん好いていてくれたと思う。町で市のたつ日には、わたしの母はいつも軽い二輪馬車に主人をのせて町へつれていった。

その家には、スキをつけたウマの馱者ぎよをつとめるディックという男がいた。彼は、ときどき、わたしたちがいる野原へはいつてきて、生け垣からクロイチゴをつんでたべた。彼はクロイチゴをたべたいだけたべてしまうと、子ウマと遊んだ。ところが彼のいう遊びというのは、子ウマをどつと走らせるために、石や棒きれを子ウマにぶつけることだった。だが、わたしたちは、彼のことを、あまり気にかけることができなかった。というの、わたしたちは、す早く去ることができたからだ。しかし、時には石があたって負傷することがあった。

ある日、彼がこの遊びをやっているとき、主人が隣の野原にいたが、彼はそのことを知らなかった。だが主人は隣の野原から、ディックがやることを見ていた。そして主人はすぐに生け垣をとびこえてはいつてくると、ディックの腕をつかまえて、耳のあたりにがんとすごい一発をくらわ

せた。ディックはおどろきと痛さのため、わーっと声をあげた。わたしは主人の姿を見ると、すぐに近くへかけていって、どうなるかを見物した。

「悪いやつめ！ 子ウマたちを追いまわすとは、なんて悪いやつだ！ 二度とこんなまねはさせないぞ。さあ、給金をもらって、とっとと家へ帰れ。二度とおまえをわしの農場で働かせはしないぞ」

それいご、わたしたちは、二度とディックの姿を見なかった。ウマたちの世話をする男はダニエルじいさんとい、主人と同じように親切な人だった。だから、わたしは幸せだった。

## 2 狩り

わたしが二歳になるまえに、けっして忘れることのできないことがあった。春の浅いころで、夜には軽い霜がおり、森にも野原にも、まだ薄いモヤがかかっていた。わたしとほかの子ウマたちは、野原の下の方で草をたべていたが、そのときずっと遠くのほうから何頭ものイヌがほえるような音がきこえてきた。

子ウマのうちで一番年上のものが、両耳をびくりと動かしていった。

「獵犬どもだー」

そしてその子ウマは、いそいでその場から走りだした。

ほかの子ウマたちも、その子ウマのあとをついて、野原の上のほうへいった。そこからは生け垣のむこうの野原をいくつか望むことができた。わたしの母親と、主人が乗馬用に使う年とったウマも近くに立っていた。そして、母もそのウマも、イヌたちのさわぎがどういふことなのか、みんな知っているようだった。

「イヌたちはノウサギを見つけたんだよ。もしあの連中がこっちへくれば、狩りを見られるよ」とわたしの母親がいった。

そしてすぐにイヌたちは、先を争って、わたしたちの隣にひろがる若い小麦の生えた畑をかけおりてきた。わたしは、イヌがそんなさわぎをするのは、今まで一度もきいたことがなかった。イヌたちはほえているのではなかった。遠ほえでもなく、鼻をならすのでもなく、ありったけの声で、「ヨー！ オ、オ、オ！ ヨー！ ヨ、オ、オ！」

といいつづけていた。

イヌたちのうしろから、ウマにのった男たちが何人もやってきた。そのうちの何人かはグリーンの上衣を着ており、みんなウマを全速力で走らせてくる。

わたしたちの年とったウマは荒い鼻息をふき、走るウマたちのあとを、しきりについていきながっているように見えた。そして、わたしたち若い子ウマも、みんなといっしょにかけだしていきなかった。だが、そのウマたちは、すぐに、野原の下のはずれへかけさった。そして、その野

原のはずれで、みんな立往生したように見えた。イヌたちはほえるのをやめ、地面に鼻をくつつけるようにして、あちこち、かけまわっている。

「みんな、においを見失ったんだよ。たぶん、あのウサギは逃げたのだろう」と年とったウマがいった。

「どんなウサギ？」わたしはいった。

「いや、わしもどんなウサギか知らんよ。でも、たぶん、森からでてきたわしらの知っているウサギのうちの一匹だろうよ。あいつらはイヌも人も、どんなウサギでも見つけしだい、追いかけるんだ」

そしてまもなく、イヌたちが、また「ヨ！ ヨ、オ、オ！」とわめきだし、みんないっしょに全速力で、わたしたちの野原のほうへ、まっすぐに走ってきた。かれらが目ざしてくるところは、高い岸と生け垣が、小川をみおろすようになっているところだ。

「こんどはウサギを見られそうだよ」わたしの母親がいった。そして、ちょうどその時、ウサギが一びき、おびえて気が狂ったようにすつとんできて、森のほうへむかった。

イヌたちもやってきた。かれらはすごい勢いで岸をのりこえ、流れをとびこえて野原を横ぎってきた。うしろからは狩人たちが追ってきた。

六人から八人の男たちが、ウマにのったまま川をとびこえ、イヌたちのすぐあとに迫っていた。

ウサギは垣を通りぬけようとした。だが垣が厚すぎるの

で、道のほうへいこうとするとどく身をひるがえした。だが、もう遅かった。イヌたちは、すさまじいさけびをあげて、ウサギにとびかかった。わたしたちは、一声、するどいさけびを聞いた。そしてそれが、ウサギのさいごだった。

狩人の一人がウマでのりつけてきて、イヌたちをむちでたたいて追いはらった。さもなくばイヌたちは、ウサギをずたずたにひきさいたことだろう。狩人は、ひきさかれて血を流しているウサギの足をつかんで高く持ちあげた。そして男たちは、みんなとても喜んでるように思われた。

わたしはひどくびっくりしてしまったので、はじめのうち、小川のほとりでなにか起こったのか目にはいらなかった。だが、わたしがそのほうへ目をむけた時、ひどい光景が目にとつた。

すばらしいウマが二頭倒れていて、一頭は流れの中でもがき、もう一頭は草の上でもがいていた。乗っていた男は、一人が泥だらけになって川からでてくるところで、ほかの一人は身動きもせず横たわっていた。

「あの男は首を折ったんだよ」わたしの母がいった。

「いい気味だ」子ウマのうちの一頭がいった。わたしも同じことを考えた。だがわたしの母は、そうはいわなかった。そして、こういった。

「いいえ、だめよ。あなたは、そんなことをいってはだめ

よ。わたしは年をとってでしよ。だから今までにこういうことは、なんども見たたり聞いたりしたことがあるけど、男たちがどうしてこういうスポーツをそんなに好むのか、いまだにわからないのよ。男たちはよくけがをするし、いいウマが何頭も、たびたびだめになるわ。おまけに烟をめちゃくちゃにしてみたい、それで狙いはウサギ一びきか、キツネ一びき、または雄ジカ一頭なんだから。それもそういうものをとりたければ、ほかにいくらでも案にとれる方法があるというのに。だけど、とにかくわたしたちはただのウマだから、どうしてあんなことをするのかわからないのよ」

わたしの母がこういうことを話している間、わたしたちは、みんな立ったまま、なりゆきを見守っていた。ウマに乗った人たちがたくさん、倒れた若者のところへ行っていた。だがその男を初めに助けおこしたのは、わたしの主人だった。主人は、そこでおこったことをずっと見ていたのだ。

男の頭はうしろへがくりとのけぞり、両手もだらりとたれ、ほかの人はみんな、ひどく真剣そうな顔をしていた。今はもう、そうぞうしさはなかった。イヌたちでさえ、おしだまっけていて、何かまずいことがおこったことを知っているようだった。

人びとはその男を、わたしの主人の家へはこんだ。わたしはあとで、その男が大地主ジョージ・ゴードンさんの一

人息子だということを聞いた。りっぱな背の高い若者で、家族の自慢の息子だった。

人びとは医者と獣医と、もちろん地主のゴードンさんのところへも、息子の身におこったことを知らせようと、八方へ散っていった。

獣医のボンドがきて、草のなかでうめきながら横たわっている黒ウマを見た。そして彼は、とてもだめだと思いい、頭をふった。そのウマは足が一本折れていた。

それから一人が主人の家へかけこみ、銃をもってもどってきた。やがて大きなバンという音と、恐ろしい悲鳴がおこった。そしてあたりはしんとなり、黒ウマはそれっきり動かなかった。

わたしの母は気持がひどく動転したようだった。母はその黒ウマとはもう長年の知りあいだったのだ。その黒ウマは雄で、ロブ・ロイという名前だった。とても氣だてのいいウマで、どこにも欠点がなかった。わたしの母はその後二度と、その野原の黒ウマが死んだ所へはいかなかった。

それから何日もたらずに、わたしたちは教会の鐘が長く鳴るのを聞いた。そして門のむこうに一台の長い奇妙な馬車を見た。その馬車には黒い布がかけられ、それを引いているのは、何頭もの黒ウマだった。そのうしろからまた一台、そしてもう一台、また一台と、すべてが黒い行列がづづき、いっぽう教会の鐘は鳴りつづけていた。

それは人びとが、若いゴードンさんの死体を教会の墓地

へ埋めに運んでいく列だった。彼はもう二度とウマにのることはできない。人びとが黒ウマのロブ・ロイをどうしたのか、わたしにはついにわからなかった。だが、すべては、小さな一びきのウサギのために起こったことなのだ。

### 3 調 教

わたしは今や美しくみごとになりはじめた。毛皮は美しく、やわらかくなっていて、輝く黒色をていしていた。足が一本白く、前額に可愛い小さな白い星がついていた。わたしは、じつに美しい子ウマだと思われていた。わたしの主人は、わたしが四歳になるまで、わたしを売ろうとはしなかった。主人がいうには、人間の若者は、おとなのように働いてはいけないのだから、子ウマだって、ちゃんと育ちあがるまで、いちにんまえのウマのように働くべきではないというのだった。

わたしが四歳になったとき、大地主のゴードンさんが、わたしを見にやってきた。ゴードンさんは、わたしの目や口、足を調べたが、みんな自分の手でさわってみて、足も四本、ずつとなでおろしてみた。それからわたしは彼の前で歩いたり、早足で進んだり、かけさせられたりした。ゴードンさんは、わたしのことが気に入ったようだった。そして、こういった。

「よく調教すれば、じつにいいウマになりそうだな」

わたしの主人は、自分で調教しようといった。それはわたしをおびえさせたり、傷つけたりしたくないからということだった。そして主人は、さっそくつぎの日から、わたしの調教をはじめた。

みんなが調教とはどういうことか知っているわけではないと思うので、ここでその説明をしておこう。

調教とはウマに鞍くらをつけたたり、面繫めんけいやくつわ、手綱たづななど、いわゆる馬勒ばくと呼ばれているものをつけたり、背中に男や女、子供をのせて運ぶようにしつけることなのだ。さらに、背中にのった人が望むままに、静かに進まなくてはならない。

そのほか鞅むながい（頸環、または首輪）、尻繫しりがい（尻ばさみ）、尻帶しりおびなどをつけることになれなくてはならず、これらをつくれる間、静かに立っていなければならぬ。さらに、体のうしろに荷馬車や二輪の軽便馬車をつけれ、歩くにも走るにも、それを引っぱらなくてはいけないということを覚えなくてはならない。しかも駁者ばさが望むとおりに、早く進んだり、ゆっくり進んだりしなくてはならない。

目で見たことについて、けっして驚いてはいけないし、ほかのウマに話しかけてもいけない。嚙かみんだり、蹴けったりしてはいけないし、どんなことにせよ自分の意志をもってはいけない。そして常に主人の意志をおこなうようにし、たとえどんなに疲れていてもお腹がすいていても、そうしなければならない。だがなによりもつらいのは、うれしく

でも跳ねあがれず、疲れていても横になれないことだ。これで、調教ということが、じつに大変なものだということもわかってもらえるだろう。

わたしはもちろん、ずっと前から面繫（おもてづな）やはづ（は）なにはなれていたし、野原や小路を静かにつれられて歩くことにはなれていた。しかし、今やわたしは馬術（ばじゆ）と手綱（たづな）をつけられることになった。

主人はいつものように、わたしにカラスムギを少しくれて、長い間、わたしをやさしくなだめてから、わたしの口にはみを入れ手綱をつけた。だが、それはじつにいやなものだった！ 口に一度もはみを押しこまれたことのないものには、それがどれほどいやな感じのするものか、思ってみることもできないはずだ。はみというのは、男の指ぐらいの太さの、つめたく固い鉄の大きな棒で、それを口の中の上下の歯の間、舌の上に押しこまれる。はみの両端は口の外へつきだして、皮ひもでそこに固定され、皮ひもは頭の上やのどの下、鼻のまわり、あごの下にまわされて、その固い鉄製の棒は、どんなことをしても、口からはずれないようになっている。じつにいやなものだ！ そうだ、なんともいやなものだ！ 少なくとも、わたしはそう思った。

しかし、わたしは、母が外へ出る時は、いつもはみをつけていることを知っていたし、どんなウマでも、おとなになればはみをつけることを知っていた。そこで、主人がお

いしいカラスムギをくれて、優しい言葉をかけてくれたり、体をやさしくたたいて親切にしてくれたこともあって、はみと手綱をつけることにした。

つぎは鞍（くら）だった。だが、これは、それほどいやなものではなかった。主人は、ダニエルじいさんがわたしの頭を押さえている間に鞍をわたしの背中に、じつにそつとのせた。それから主人は、たえずわたしの体を優しくたたいたり話しかけたりしながら、わたしの胴の下に、腹帯（はらぢき）をしっかりつけた。そしてわたしはカラスムギをすこしもらい、そのへんをすこしひきまわされた。

主人はこれを毎日くりかえし、やがてわたしはカラスムギと鞍を心待ちにするようになった。そしてついにある朝、主人はわたしの背中にのり、ふかふかした草の茂る野原をのりまわした。それは、なんとも妙な感じのするものだった。しかし、じつはその時わたしは、主人を背中にのせて歩くのを、いくらか誇らしく思った。その後主人は毎日、少しずつわたしにのりつづけたので、わたしはすぐそれになれた。

つぎにいやなことは蹄鉄（ていてつ）を足につけることだった。最初それはじつにいやだった。主人はわたしといっしょに鍛冶（かじ）屋の仕事場へいった。それはわたしが痛いめにあわされたり、おびえたりしないようにするためだった。鍛冶屋は、わたしの足の一つ一つ手にとって、ひづめをすこしずつ削り落とした。痛くはなかったので、作業がみんな終わるま

で、わたしは三本足でおとなしく立っていた。

それから鍛冶屋は、わたしの足の形をした鉄片をとって足にあて、何本かの釘を打ちこんで、わたしのひづめにしつかりとめた。

わたしは足がひどくこわばって重くなったような感じがした。しかし、やがてわたしはそれにもなれた。

さて、こういうことが終わると、主人はわたしを馬具にならしはじめた。わたしがまだつけたことのない馬具がたくさんあった。

まず最初に、わたしは首のまわりに固く重い鞅むながい（首輪）をつけられた。それから目のところに、大きな当て物がついている目隠しめかくしというものをつけられた。目隠しとはよくいったものだ。というのは、それをつけられると、左も右も見えなくなり、自分の前まっすぐの方向しか見えなくなったからだ。

つぎには、いやな固い革ひものついた小さな鞍くらのようなものをつけられた。この固い革ひものは、尾っぽのま下を通すもので、尻しりがよいといった。わたしはこのしりが、大きらいだった。これをつけるには、わたしの長い尾っぽを二つに折って、むりやり革ひものをぐらせる。はみと同じくらいいやなものだった。この時ほど、けつとばしてやりたくなつたことはない。だが、もちろん、とてもやさしくしてくれる主人をけとばすことはできなかった。そうこうするうちに、やがてわたしは、あらゆることになれた。そし

て母親と同じくらいじょうずに自分の仕事をはたせるようになった。

わたしがうけた訓練のうちで、一つ、どうしても言うておかなければならないものがある。それは、いつも思うことだが、その後の生活にとても役立ったからだ。

主人は、わたしを二週間、近くの農夫のところに送ってすごさせた。その農夫は、片側に鉄道が通っている野原をもっていた。その野原にはヒツジやウシが何頭かいて、わたしはその中に放された。

初めて汽車がそばを通った時のことは、いつまでもけつして忘れないだろう。わたしは鉄道と野原をへだてている柵さくの近くで、静かに草をたべていた。すると遠くからへんな音がきこえてきた。そして、その音がどこからきこえてくるかもわからないうちに、なにか長くつながつた黒いものが、すごい勢いでがたがたいいながら煙をはいて、わたしのそばをとぶように通りすぎ、あつというまにどこかへいってしまった。

わたしは体をめぐらせると、全速力で、その野原のできるだけ遠くへかけていき、驚きと恐れで荒い鼻息を吹きながら立っていた。

その日のうちに、ほかにもたくさん汽車が通った。あゝるものはゆっくり走ったが、それは近くの駅にとまる汽車で、ときどき止まる前に恐ろしい金切り声やうめき声をあげた。

わたしはじつに恐ろしいと思った。だが雌ウシたちは、平気で静かに餌をたべていた。そして黒く恐ろしいものが煙を吐き、すごい音をたてながら通りすぎていっても、めったに頭をあげなかった。

最初の二、三日間、わたしは穏やかに草をたべていることができなかった。しかしやがて、その恐ろしいものは、けっして野原へはいってこず、またわたしをひどいめにあわせるものでもないことがわかったので、氣にとめなくなった。そしてすぐに、ウシやヒツジたちと同じように、そばを通りすぎていく汽車を少しも氣にしなくなった。

そのごわたしは、蒸気機関車を見たりその音をきいたりして騒いだり暴れたりするウマをたくさん見た。しかし、わたしは主人の親切な配慮のおかげで、鉄道の駅でも、自分のウマ小屋にいる時と同じように、おびえないで落ちついていられた。

つまり、だれでも若いウマを調教したいと思うなら、こういうふうにするのがいいということだ。

わたしの主人は、わたしと母をよくいっしょに二頭だての引き具につけて出かけた。これは、母がおちついていて、知らないウマよりも、わたしにじょうずに進みかたを教えることができたからだ。

母はわたしに、しっかりとめをはたせばだいにきれいと話した。また最善をつくして主人をよろこばせるようにすることが、いつでも一番賢いやりかただといった。

「でもね」と母はいった。「人間には、じつにいろいろな人がいるのよ。わたしたちの主人のように、どんなウマでも主人のために働くのが誇らしくなるような、やさしく氣だてのいい人たちもあるし、ウマやイヌを自分のものだと呼ぶ資格さえないような悪くて残酷な男もいるんだよ。そのほか、バカで見栄<sup>えい</sup>っぱりで、無智で氣がきかない人もじつにたくさんいて、そういう連中は、自分がどんな人間だかということをけっして考えてみようとしなんだよ。そしてそのような人たちは、ただ考えがたりないばかりに、ほかのすべての人より、たくさんウマをだめにしてしまうの。その人たちは、わざとそうしようと思っているわけではないんだけど、でも結果はそうなってしまうんだよ。わたしはね、おまえがいい人の手に渡ってくればと願っているよ。でもウマは、だれに買われるか、だれに使われることになるか、まったくわからないんだよ。それはみんなめぐりあわせなのさ。でも、それでもわたしは、お前にいっておくよ。どんな時でも最善をつくすんだよ。そしてお前の名声を保つようにね」

#### 4 バートウィツクの暮らし

そのころ、わたしはウマ小屋にいることが多かった。毎日、体にブラシをかけられ、毛皮はミヤマガラスの翼のように光り輝いた。

五月の初めごろのこと、大地主のゴードンさんのところから、男が一人やってきて、わたしはその男につれられて地主の屋敷へいった。主人は、

「さようなら、ダーキー。おとなしくするんだよ。そしていつもいっしょうけんめい働けよ」といった。

わたしは「さようなら」ということができなかったの  
で、主人の手に鼻面をおしあてた。主人は、わたしをやさしくたたいてくれた。そしてわたしは、この世で初めての家を去った。わたしは大地主のゴードンさんと数年間すんだので、その暮らした所について少し話したほうがいいだろう。

ゴードンさんの敷地は、バートウィック村のはずれにあった。大きな鉄の門をはいつたところに、最初の門番小屋が建っていた。それから大きな老木の並木の間にいてゐるなめらかな道を進むと、もう一つ門番小屋と門があつて、そのむこうに家と庭があつた。そしてさらにそのむこうにウマを放しておく囲いと、大きな木のある果樹園とウマ小屋があつた。たくさんのウマと馬車をいれておく設備があつたが、わたしは自分がいれられたウマ小屋だけについて話そう。その小屋はとても大きくて、広く四つに仕切られていた。庭のほうへむかつて大きな開き窓があいていて、空気の流通がよく、いごちがよかった。

最初の仕切りは大きな四角い仕切りで、木戸がうしろでしまるようになっていた。ほかの仕切りはふつうの仕切り

でいい囲いだつたが、それほど大きくはなかつた。そこにはほし草をいれる低い棚と、穀物をいれる低いかいば桶があつた。

その囲いはルーズ・ボックスと呼ばれるが、それはウマをつながないでそこに入れ、自由に好きなようにさせておくからだつた。このルーズ・ボックスに入れられることは、とてもすばらしいことだつた。

馬丁は、このすばらしい囲いにわたしをいれてくれた。そこは清潔で小ざっぱりしていて、風通しがよかった。わたしは、それよりいい囲いには一度もすんだことがなかつた。まわりの囲いもあり高くないので、一番上にはまっている鉄の手すりを通して、外でどんなことがおこなわれているか見ることができた。

馬丁は、じつにすばらしいカラスムギをいくらかわたしにくれて、体をばたばたとたたいてくれ、やさしく話しかけてから出ていった。

わたしは穀物をたべてしまうと、あたりを見まわした。わたしのとなりの囲いに、小さな、ふとった灰色のポニー（小型種のウマ）が一頭、はいつていた。ふさふさしたたてがみと尾をつけていて、じつに美しい顔をしていたが、小さな鼻がなまいきだつた。

わたしは、自分の囲いの上にある鉄の手すりのところまで頭をあげていった。

「こんにちは。名前はなんていうの？」